

博物館学と平和学の融合の試み

—— 新聞を教材とした授業実践紹介 ——

榎 英一

(愛知文教大学教授)

兼 清 順子

(立命館大学国際平和ミュージアム学芸員)

本稿は、博物館学において実施された資料整理の授業を紹介して、平和学の授業としても活用できる可能性を考察するものである。「新聞を用いての、博物館における資料整理と展示の実習」では、博物館資料としての新聞について取り上げ、新聞が作られる場で、また、保存される場でいかに情報が失われるかを明らかにするとともに、具体的名資料整理方法を教えている。考察では、この授業の意義と平和学の授業として展開する可能性やその際の留意点などをまとめた。

はじめに

本稿の目的は、「新聞を用いての、博物館における資料整理と展示の実習」として行なった学芸員課程の授業の実践紹介と、この授業が平和学としても実施可能なことを考察することである。

〈授業の概要〉

- ・科目名 文化財実習A、C
 - ・場所 立命館大学文学部
 - ・日時 2007年11月5日(月)1限(A)、2限(C)
- 通年開講科目であり、学芸員課程の博物館実習(学内実習)に相当する。対象は文学部の3年生以上。ただし、地理学、日本史学(文献史学)、考古学はそれぞれの実習(地理、古文書、考古学)で代替可能なので、このA、Cの受講生はほとんどが文学、外国史、哲学等の専攻生である。授業はA、Cそれぞれ別の学生(A5名、C10名)を対象とし、同内容で行なった。

この授業(90分間)の目標は、学芸員として必要な資料整理および展示技法に対する理解を深め、技術を習得することである。

事前に夏期休暇中の課題として「新聞を用いた展示案の作成」を課しており、使用した複数の新聞紙および展示案レポートを、この授業の前に提出させている。

I 授業の経過

1 事前の課題提示

2007年7月9日(夏期休暇前の最後の授業)に次のような課題を提示した。

- (1) 8月15日付け新聞紙(複数)を入手せよ。
- (2) 現代史の展示として、その新聞紙を展示する展示案を作れ。
- (3) 具体的には、下記を作成し、A4判1枚に記載せよ。
 - ① 説明文 500字以内(タイトル含む)。
 - ② キャプション(モノの説明。「〇年〇月〇日付け〇新聞」といったもの)、20字以内。必要枚数だけ。
 - ③ 展示方法の説明。〇新聞第〇面を平らに置く。〇記事を切り取って天井から吊す、など。図示可。
- (4) 上記(3)と新聞紙(該当記事だけでなく、全部)と一緒に封筒に入れて、休み明けに提出せよ。

課題の意図

新聞を読ませること、考えさせること、また自発的な博物館見学を誘導することを目的とした。あわせて各地からの出身学生がいることを利用し、教材として有用な全国紙の異版や地方紙の収集をもくろんだ。

2 講義・実習1(資料分類)

(ゴチック体の字は動きに関するもの)

- (1) 問い——分類とは何か?

机上に新聞紙を積み上げる。

この資料はどのように分類することができるか?

どのような分類方法を知っているか?

実際に博物館で行なわれている資料分類の例を紹介。

分類することはどのような意味があるか?

博物館が資料を分類しなければどうなるか?

(2) 作業1—実際に分類してみる

机上の新聞紙を学生に分類させる。作業の結果、新聞社を単位とした約30の山ができた。

(3) 分類作業の検討

この分類は有効か？

実務上、多すぎる分類項目は不便である。1分類1点の資料がたくさんあるというのは、分類にならない。

経験上、分類は5～10程度が有効である。一群の資料を整理する場合、分類項目は、多すぎても少なすぎても「整理」上の効果は薄い。

(4) 作業2—再度の分類

再度、学生に分類させる。地方紙の地域ごとの山と、全国紙5社(朝日、読売、毎日、産経、日経)の山ができた。

(5) 説明—分類作業の意義

新聞紙は、発行社や地域、日付などがわかりやすく、分類しやすい資料である。

大分類はこれでよいとしても、大きな山(たくさん資料がある)は、その中での分類(中分類、小分類)が必要である。あるいは「分類」と呼ばないにしても、目録を作る場合は何らかの序列を作る必要がある。どういった序列が可能か？

新聞社(発行元)ごとに分類すると、同じ新聞社の東京本社版と大阪本社版は同じ仲間ということになる。しかし新聞社は違っても、東京本社版どうしが仲間である、という分類はできないか？ 分類はさまざまな視点が可能である。

またこのように分類したことにより、これらの新聞が持っていた最初のカテゴリ「持ってきた人別」、また「袋に入っている順番という秩序」は、解体してしまい、既に復元不可能になった。「整理」は「破壊」でもある。

3 講義・実習2(新聞と情報)

(1) 作業3—版による違いを探そう

同じ新聞社の同じ日付の新聞を対照させて、「版」による違いを発見させる。

(2) 説明—新聞には「版」がある

同じ新聞社発行の同じ日の新聞であっても、地域や版によって紙面が違う。

ニュースは刻々と変わり、新聞社は配達・発送にかかわる印刷時間の時差を利用して、最後まで新しい記

事と差し替える。記者にとっては締切が何度もあることになる。高校野球の速報で印刷時点で未定のスコアボードが黒く印刷されている例が分かりやすい。また誤報だった場合に、直ちに差し替える。

自社だけのスクープの場合、他社が途中で追加しないように、最終版にだけ掲載する場合がある。

後になって新聞記事を検索する場合は、縮刷版を利用する(最近では縮刷版発行中止)。しかし縮刷版は、原則として本社発行の最終版紙面である。したがって、最終版に至るまでに差し替えられた記事は残らない。また地方版も残らない。

なお、誤報したことを隠すために、縮刷版のためだけの紙面を刷って収録したり、特定の記事を削除することがあるようだ(例。朝日新聞、伊藤律架空会見記)。

地方版の情報を残すために、地方の図書館で、縮刷版だけではなく実際に発行された新聞紙本体を保存している場合がある。しかしこれも、すべての版ではないことに注意。

記事を引用する際は、新聞名、日付以外に、発行所(大阪本社など)、面、版まで記載する必要がある。なおまた、新聞紙の現物も自分で保存しておくことが望ましい。図書館や博物館には限界がある。

(3) 作業4—なぜ記事は変更されたのか

記事変更が行われた異版の新聞記事を対照して、新聞社はその記事変更で何をしたかったのか考える。見出しの変更、記事全体の分量の変更、写真の変更など。

(4) 補足1—新聞社についての説明

新聞社について、全国紙、ブロック紙、地方紙といった分類がある。これは便宜的なものであり、戦時中に国策によって新聞社を統合したことが尾を引いている。

ブロック紙、地方紙ごとのネットワーク、連合がある。具体的には、連載小説や囲碁・将棋のタイトル戦などを比較すると判明する。

新聞記事には、自社独自の物と通信社が配信する記事とがある。通信社配信記事は、その表示が無くとも、違う新聞社に同文の記事があることで判明する。

作業。地方紙を対照して発見させる。

通信社配信の記事に対する訴訟では、通信社ではなく掲載した地方紙の責任が問われた(東京女子医大病院での女児死亡事故に関する名誉毀損に対して、2007年9月18日東京地裁判決)。地方紙には酷だ。

(5) 補足2―新聞記事の読み方の例

教師が用意していた新聞記事コピーを配布し、「おかしな紙面探し」をさせる。ある記事の連続する数行だけ、文字間が空いている（1行の文字数が他より少ない）。

この記事の中で数文字削除する必要があったが、紙面全体を直して調整する時間がなかったと推測する。憶測すれば、「〇〇新聞社員」を「会社員」とする類か。スポンサーが圧力をかけて表現を訂正させる場合もあるだろう。

4 講義3（新聞の展示）

採点済みの全員のレポートを戻して解説。

(1) 新聞紙の収集

結果がすべてである。博物館の展示も同じであって、何が出ている、何が出ていない、といったことで評価されてしまう。熱心にやったが運が悪くてダメだった、といった水面下の努力は観客には見えない。

結果としてのバラエティは評価する。意外性も評価する。宗教新聞、政治新聞、地方新聞など。あるいは同じ新聞の違う版を揃えるなど。

(2) レポートへの講評

博物館としてはこう思う、と書かなくとも、何を選びどのように展示するかが主張である。

資料の特徴を生かしたい。例えば、新聞記事のうち、解説記事中心の展示は、雑誌記事や図書を中心としての展示と同じようなもので、新聞の特徴を生かしていない。

展示方法は、立てるか寝かせるか、宙に吊るか、工夫がほしい。

新聞記事の引用に必要な情報は何か、新聞社名だけではないことに注意。

使用する記事を切り抜いた場合、しっかり記録しておかないと、新聞の基礎情報（版など）を失うことに注意せよ。

地方紙をうまく利用できないか。

レポート読者（今回は教師）への親切として、使用記事をマーカーで囲む、記事の頁に付箋、展示に使う部分をオモテに畳む、などがあった。

(3) 学生が作成した展示題目（一部）

- ・「8月15日の新聞の朝刊の一面から見る終戦記念日」
- ・『日本が伝えたいこと、「私」が伝えたいこと』
- ・「62年目の日本―今を生きる私たちの戦争―」
- ・「新聞にキザまれた戦争たち」

- ・『日本の戦争と「今」』
- ・『新聞で見る終戦～私の住むまちの戦争』
- ・「語り継がれるヒロシマの体験―おねがいです、みずをください」

5 学生の感想

毎回、授業後に学生は「コミュニケーション・ペーパー」を提出する。これには感想、質問、要望などが記される。

- ・新聞について自分は何も知らなかったな、と痛感しました。版の違いによる比較や、そこから読みとれる新聞社の意図等、おもしろかったです。マスコミとの関連について、テレビCMについても、電力会社のような立場の会社のCMが他のにないか意識してみようと思います。
- ・今回のスポンサーの話聞いて、博物館絡みの記事が一様に語られないことがわかりました。先生は何紙くらいの新聞を読んで、博物館展覧会の情報を得ているのですか？
- ・新聞の版によってこんなにも内容が違うということに驚きました。
- ・集めた新聞を広げてめぐりながら比較はしていたものの、13版、14版といったことの意味がわかっておらず気にしていなかった。先生はこの新聞を保管されるのですか。処分はしないで下さい。全国戦没者追悼式の記事は、他の地方誌で同じ文面を用いているものがあつた。これも通信社の記事なのですか。
- ・新聞の版のキャラクリが分かって、速報性を売りにするメディアであることを実感し、目からウロコの感でした。「分類」の難しさも再び実感。確認ですが、結局一番大まかに比較対象になるのは全国紙5つと大地方紙連合の2グループという認識で大丈夫でしょうか？
- ・新聞に「14版△」や「▲」があることに今まで気づかなかったので、自分の視野の狭さを反省しています。今日の話だと、新聞は展示資料としてはとても扱いにくく、観る者に誤解を与えかねない危険性のあるものだとわかりました。
- ・分類することで秩序を壊してしまうのなら、より良い分類方法はどうかと思ったらわかるのだろう。
- ・今回の授業で新聞に対する見方が変わりました。もう少し注意深く見ていこうと思う。
- ・最近マスコミ業界に興味を持ってよく新聞をよむようになったのですが、版のちがいを気付かずにいました……同じ物でもトップ記事がちがうとは、こう

いう機会ではしか知られないと思うので、よかったです。

- ・新聞の見方について、ここまで考えて見たことがなかったもので、新聞は同じでも少しずつ時間や、地域によって異なる、というのはとてもおもしろかったです。博物館や美術館の業界新聞もあるのでしょうか？
- ・今日の授業では、普段何げなく見ている新聞はいろいろな視点から問題点を考えられることを知りました。版や場所によって、記事が異なるということにも驚きました。私は地方出身なので、出版元の地域より、未熟な新聞を読んでいたことを知り、ショックでした。
- ・夏休みの課題レポートに、用いた新聞を明記するよう指示があったが、社名、日付だけでは不十分だということを、版の説明などを聞いてとてもよく分かった。
- ・新聞の版についての情報ははじめて知りました。展示に関しては、そこでも展示のための資料の変質と保護という点で選択がいることを感じました。
- ・版によって、記事の内容が変わるといってお話が面白かったです。これからは、少し注意して、新聞を読む様にしたと思います。
- ・新聞をよくみると面白いなあと思いました。駅で売られているのと、配られるのは違うとは知っていましたが、考えてみれば地方によって違うのはあたりまえですし、面白いなあと思いました。またスポンサーによって記事が左右されるのではという憶測もなるほどなあと思いました。

II 授業の主旨

この「文化財実習A、C」の目的は、学芸員として新規採用された場合、指導してくれる同専攻の先輩がいなくとも、とりあえず当座を何とかしのげる程度の能力を習得することである。歴史民俗系博物館での資料取り扱いの実技を実践的に教えることを目標として、陶器・土器・掛け軸・卷子・和装本・屏風等の取り扱い、温湿度・照明の計測、調書の取り方等を教授している。

同質の多量の資料（絵葉書、チラシ、キップ、パンフレット、文書、民芸品など）の整理は、学芸員となった場合にただちに直面する可能性が大きい業務である。その実習として、この回の授業を行った。

「8月15日付」を指定したのは、帰省中の学生が多く各地方の新聞を集めやすいこと、覚えやすい日であること、ある程度強制的に記事を読ませたかったことからである。しかし企画記事や予定原稿が多い日であり、この授業の主旨からは、最善の選択ではなかったと考える。

(榎)

III 考察

近年、大学における平和学関連講座の数が増加している。しかし、日本社会の中で平和について考える際に避けて通ることができない過去の戦争の問題に対する知識と認識は、大学生を中心とした若年層の間で低下している。今後、平和学関連講座の充実とともに、平和学以外の講座の中でもこうした問題にアプローチすることは重要な課題である。本稿で紹介した「博物館資料としての新聞」の授業は、立命館大学における学芸員養成課程の「文化財実習」として実施された。よって、「平和の大切さをどう伝えるか」や「戦争の記憶はどのように作られるか」問いかけてはいない。しかし、情報が発信される際や歴史として残される際に、何が起きているかを具体的に考察させている。これは、「平和の大切さをどう伝えるか」や「戦争の記憶はどのように作られるか」考えるために必要な知識の獲得と認識の深化に欠かせない。また、8月15日の新聞記事を用いた展示案の作成は、何をどう伝えるかの工夫が必要であり、この作業を通して学生は戦争についての報道に目を向け、自らの視点を掘り下げる機会を与えられている。戦争と平和の問題に関して、扇動的な報道に流されず、何が問題なのか自分で考える力を養う授業であり、平和学や平和学習にも有効な授業となるであろう。

ここでは、この授業内容を平和学の授業の一環として実施する意義と留意点について考察する。この授業は身近な資料である新聞を取り扱い、作業を通じた学習を行う点から、アレンジ方法により、高校生を対象とした実施も可能である。広く、高校、大学において他の教科と乗り入れることができる平和学の授業例の蓄積に寄与し、平和学習の機会の増大につながることを望むものである。

1 情報が作られる場面での取捨選択

版による紙面の違いや、通信社配信記事などを確認する作業を通して、情報は生産される際に取捨選択されていることが確認された。これは、新聞報道を客観的に読み解くために必要な基礎的な知識であり、メディア論や歴史学を始め、資料や報道と関連する分野で紹介される内容だが、ここでは比較作業を通して学生にちがいを発見させている。コミュニケーション・ペーパーを記した出席者15名のうち12名が、版や地方の違いについて知った驚きを記している。

2 情報が蓄積される場面での取捨選択

この授業では、情報は刻々と消えるということ、分類作業を通して体験させている。これは、社会全体における記憶(情報の保存)の問題につながっている。新聞が刻々と記事を取捨選択するように、博物館や文書館は、歴史を保存して後世に伝えると同時に、残さないものや忘却される出来事を選ぶ場でもある。今日の博物館は政治の場であり、特定の歴史の強調や排除に対して政治的介入や社会的な異議申し立てが行われる。その際、指摘を受けるのは展示の持つメッセージや集団や出来事の表象方法である。確かに展示は博物館の活動の中で社会的・即時的な影響力が強い分野である。しかし、長期的な視点に立てば、伝える歴史と伝えない歴史の選別において資料の収集・保存活動が果たす役割を無視することはできない。むしろ、より大きな役割を果たすと考えることもできる。

アスマンはアーカイブや博物館のような集合的な知識の蓄積装置の特長として「保存、選別、公開性」をあげ、保存することが中心的な役割であるアーカイブでは、整理して捨てることが係員の重要な活動になっており、「情報が蓄えられている場所であるばかりでなく、それに劣らず情報が脱落している場所でもある」(アスマン p.410)と述べている。

博物館における情報の脱落は、“持ち込まれても受け入れない・あるものを捨てる”という物理的な排除と、“資料整理の際に記録に留める情報の選別”の2段階構えで行われる。資料整理は「情報を残す」ことに主眼が置かれるため、「情報を捨てている」ことは普通あまり意識されない。この授業では作業によって「崩した情報を復元できない」という体験を与えて、このことに対する注意を喚起している。

博物館(や、それ以外の施設においても、同様の過程が存在する)に残されている情報が複数の取捨選択の過程を経たものであることを具体的に認識することは、今後博物館の内外で資料を扱う際に必要な認識であると同時に、社会の中でどのような記憶や記録が残されていくのかという問題について考える際にも重要な認識である。

この授業では、博物館のような施設を通して歴史の取捨選択が行われるという点は特に強調されていないが、学芸員課程の授業であり、すでに学生は博物館施設の機能と社会的役割を理解していることを前提としている。平和学として実施する場合には、博物館の実際の仕事や社会の中の記憶装置としての博物館の役割について確認する機会を組み込む必要があるだろう。

3 戦争についての報道に目を向け、自らの視点を掘り下げる

課題を作成するためには、8月15日付の新聞を複数集めて読まなければならない。課題は「戦争」に関する展示ではなく、「新聞記事を用いた」展示の案作成であるが、8月15日は日本社会の集合的記憶に刻まれた日付であり、戦争に関わる報道が極めて多く、これらに目を向けることになる。そして、展示案を作成するためには、そこから何を読み取り、どのように伝えるかを明示しなければならない。そこで、学生は現代の日本の戦争と関連した報道に対する視点を掘り下げることになる。新聞についてのレポートであれば、新聞に何が載っていたか報告するだけでも成立するが、これを題材として展示案を作成するためには、視点が要求される。レポートを提出した学生11名のうち、7名が戦争をテーマとした展示案を作成した。原爆のような特定の戦争の記憶に焦点を当てた案、戦争記事の取り扱い状況を比較して新聞社の特色の違いを明らかにした案、記事を利用して戦争に対する自分の考えを展示する案など、彼らの視点はまちまちであり、そのため、多くの論点を含んでいる。

この授業では、お互いのレポートを見ることにとどまっているが、平和学として発展するには、これらを題材に、どのような論点があるのか、互いのレポートからの学びを深める機会を設けることが有効であろう。

(兼清)

参考文献

- 山中恒、2001『新聞は戦争を美化せよ-戦時国家情報機構史-』小学館
 アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007『想起の空間』水声社

付記

本稿は、榎英一の授業を、聴講していた兼清順子が文章化したものに榎が加筆し、兼清が考察を加えたものである。

本稿の授業記録は、基本的に文化財実習Aのものであるが、コミュニケーション・ペーパーは、A、C両方のものである。また当初こうした形での公表を予定していなかったため、学生のレポートの題名等の記録は不完全である。

文責はⅡまでが榎、Ⅲは兼清にある。

【学生実習レポート】 1

文化財実習Cレポート1

8月15日新聞展示計画

1. 説明文

日本の戦争と「今」

昭和20年8月15日、それは日本が62年前に敗戦を認めた日である。毎年8月15日には、政府が日本武道館で全国戦没者追悼式を開く一方、各地でも様々な追悼行事や集会が行われる。しかし、終戦から62年が過ぎた今日、戦争を実際に体験してきた方々は年々少なくなり、若い世代の子供たちにとって、戦争とは実際にどのようなものだったのか、戦争体験者の方の話を聞き、その戦争体験を共有する機会はだんだんと失われてきている。

現在わが国では、イラク戦争をめぐる顕著化した戦力保持の問題、そしてそれを受ける形で問題にされた憲法改正法案、日本と韓国をめぐる内閣総理大臣の靖国神社参拝問題など、平和をめぐる様々な問題を抱えている。今回の展示『日本の戦争と「今」』では、日本が経験した戦争の記憶を後世に伝え、若い人々や子どもたちが戦争とはどのようなものであったのかということ知り、その理解を深めてもらうことを目的としている。そして、今現在平和に向けてどのような取り組みが行われているのかを知ることを通して、この展示を見る人々が平和への強い願いを持ち、そのために行動するきっかけとなることを願っている。

(493文字)

2. キャプション

- 記事1)「首相、靖国参拝見送り」 2007年8月15日付 京都新聞
- 記事2)「終戦記念日 各党談話」 2007年8月15日付 京都新聞
- 記事3)「社説 戦争の「記憶」を共有したい」 2007年8月15日付 京都新聞
- 記事4)「文化 対論 戦後再考 戦没者慰霊の形」 2007年8月15日付 京都新聞
- 記事5)「戦争だめ」 同和で訴え」 2007年8月15日付 京都新聞
- 記事6)「社説 終戦の日 静謐な追悼の日となるように」 2007年8月15日付 読売新聞
- 記事7)「戦後62年対談 日米戦争認識の差どう解決」 2007年8月15日付 読売新聞
- 記事8)「気流 読者のページ」 2007年8月15日付 読売新聞
- 記事9)「女学生も、砲弾を作った」 2007年8月15日付 読売新聞
- 記事10)「昭和20年8月14日 京橋駅空襲」 2007年8月15日付 読売新聞
- 記事11)「大阪府教委「貴重な戦争遺跡」高射砲陣地 撤去待った」 2007年8月15日付 読売新聞
- 記事12)「きょう終戦から62年」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事13)「政府広報」 2007年8月15日付 朝日新聞

- 記事14)「天声人語」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事15)「社説 戦争という歴史」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事16)「靖国問題 割れる宗教界」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事17)「平和の寺子屋 来月始動」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事18)「声 語りつぐ戦争」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事19)「戦艦服 母は着た 白いかっぽう着の記憶」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事20)「学校に残る戦争 おおさか戦後62年 階段室、空襲の記憶」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事21)「戦わない国は 国民保護法」 2007年8月15日付 朝日新聞
- 記事22)「敗戦の傷跡いまでも」 2007年8月15日付 朝日新聞

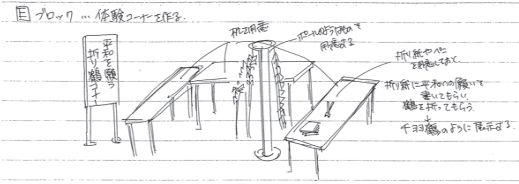
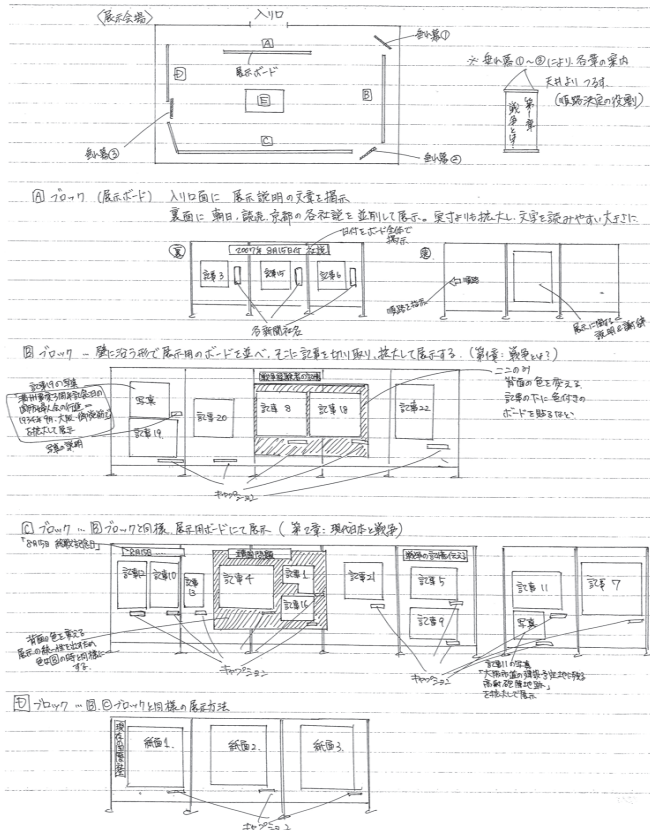
- 紙面1) 2007年8月15日付 朝日新聞 朝刊 第6面 (国際)
- 紙面2) 2007年8月15日付 読売新聞 朝刊 第6面 (国際)
- 紙面3) 2007年8月15日付 読売新聞 朝刊 第7面 (国際)

3. 展示説明

今回展示に使用する新聞は朝日新聞、読売新聞、京都新聞の3紙である。いずれも2007年8月15日付の朝刊である。

今回の展示では、平和ということ大きなテーマとし、戦争を知らない世代の人々に戦争に対する理解を深めてもらい、本展示が平和に向けての積極的な活動のきっかけとなることを目標とする。展示は3部構成にしたいと考えており、第1章に「戦争とは?」、第2章に「現代日本と戦争」、第3章に「世界と戦争」と言う章立てを考えている。展示会場を中心に来場者の意見や感想、平和への願いを込めたメッセージを折り紙に書いてもらい、折鶴を作成してもらうスペースを置き、壁に沿って第1章から3章まで順番に展示したい。展示する際注意することは、小学生にも理解できるよう、難しい漢字には読み仮名を付けるよう工夫したいと考えている。

以下詳細図示



【学生実習レポート】 2

文化財実習 C 夏休みレポート 16010500013 相澤佑佳
現代史の展示、展示案

1. 展示内容の説明

日本の現在を見据える際に重要な契機は様々あるが、その一つが私たちに近き身近なものである新聞だろう。ここでは終戦の日の新聞を展示し、テーマを「62年目の日本—今を生きる私たちの戦争—」とした。

これらの新聞を展示するにあたって、注目したのは以下の二点である。

- 一、終戦の日関連の記事が全体に占める割合の比較
- 二、終戦の日に関連しての国民の声

朝日新聞と読売新聞との対比として見てみると、読売新聞より朝日新聞の方が、微妙な差ではあるが、より多くの部分を終戦の日関連の記事が占めている。これを、京都と静岡との対比で見ると、両新聞ともに、静岡版のものより京都版の方が、若干、終戦の日関連の記事が多くなっている。どちらも終戦の日ということで、戦争体験者の特集記事を組んだり、終戦に際しての読者の声を集めた欄を設けたりしている点では共通であり、細部にどれほど戦争の話題を取り上げているかにより違いが生じている。また、その他の新聞と比較してみると、毎日新聞が全体の45%と最も多く終戦の日を強調しており、読者の声を反映させた特集記事なども組んでいるが、逆に、日経新聞では、戦争の話題が殆ど取り上げられていなかった。

2. キャプション

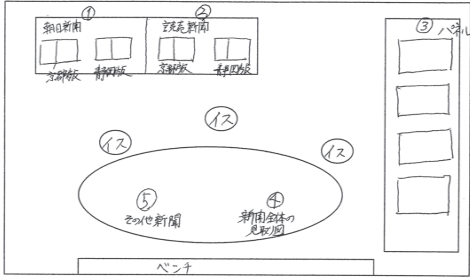
2007年8月15日、読売新聞、東京本社、静岡
2007年8月15日、朝日新聞、東京本社、静岡
2007年8月15日、読売新聞、大阪本社、京都
2007年8月15日、朝日新聞、大阪本社、京都
2007年8月15日、日本経済新聞、東京本社、静岡
2007年8月15日、毎日新聞、東京本社、静岡
2007年8月15日、産業経済新聞、東京本社、静岡

3. 展示方法の説明

主に、終戦の日の話題をめぐる、朝日新聞と読売新聞の比較、また静岡と京都の新聞の比較を中心に展示する。主な展示内容・方法の項目を下に記す。また、位置関係などについては別紙の図参照。

- ① 朝日新聞の京都版 P22、静岡版 P9 の「声」欄を開き、ガラスケースの中に二つの新聞を平らに置いて並べる。
- ② ①の隣のスペースに、読売新聞の京都版 P12、静岡版 P10 の「気流」欄を開き、同じようにケース内に平らに置いて並べる。
- ③ 朝日新聞・読売新聞の京都版・静岡版という四つの新聞の中の、終戦関連の記事をコピーして切り貼したパネルを作り、新聞ごとに分けて、比較できるように展示する。
- ④ それぞれの新聞の全体の見取り図(どのような記事をとどこに取り上げているか)を示したものを作り、③の冊子にしてテーブルの上に並べておく。庶れるよう、ベンチやイスも設置する。
- ⑤ 毎日新聞、産経新聞、日経新聞は、手に取って自由に読めるように、④の冊子の横に並べて置いておく。

展示方法・図



【学生実習レポート】 3

2007/10/14

文化財実習(C)レポート6 8160070008-1 科目専属修生 大工園 実央
8月15日付け新聞展示案『新聞で見終戦—私の住むまちの戦争』

＜目的・内容＞二度と戦争をおこさない為にも、ひとりひとりが平和の尊さを学び、戦争を知らない世代も、次世代へ戦争の悲惨さを語り継ぐ「伝達者」となることが重要である。終戦の日の各新聞の報道を見比べ、見学者が今後、「語り部」となっていくためのヒントを得られる取組としたい。戦争は、原爆投下の広島・長崎だけでなく、地方ごとにも悲惨な歴史があり、様々な爪あとが残る。あまりにも辛い経験の為、事実を語らない方も多いが、語る努力を惜しまない方々もたくさんいる。しかし、実際に戦争を経験した語り部が高齢の為になくなりつつある。そして、近い将来、戦争を知らない世代から、さらに知らない世代へと語り継ぐ時が来るのである。新聞は、世の出来事全般を伝えるだけでなく、過去の出来事を反芻したり、未来への指針を明らかにすることもあり、戦争の語り部としても、重要な役割を担っている。また、全国紙でも、発行所によって同じニュースを違う言い回しで伝えたり、地方版では取り上げる記事の内容が異なる。地域に根付いた記事を提供している点に注目して、多様な「戦争の記憶」を共有できるように紹介する。昨今、テロ特措法の延長や憲法改正の動きがみられる中、まずは「知る」ところからはじめ、自分自身や大切な家族、友人にも関わることで「戦争」や「平和」を受け止め考えよう。

＜キャプション＞・・・合計27部

- I. 平成19年8月15日付 朝日新聞 朝刊 東京・大阪・京都・広島・北九州版
- II. 平成19年8月15日付 読売新聞 朝刊 東京・大阪・京都・広島・北九州版
- III. 平成19年8月15日付 朝日新聞 夕刊 大阪・北九州版
- IV. 平成19年8月15日付 読売新聞 夕刊 大阪・北九州版
- V. 地方紙・その他の全国紙=平成19年8月15日付 京都・中国・大分合同・山陽・西日本・毎日・産経・フジサンケイビジネスアジantimes・日本経済・日本農業・赤旗・公明新聞

＜展示方法＞

- 朝日・読売新聞の実物の『①1面(トップ)』と『②2〜5面(地方面)』と『③テレレ欄』をボードに貼りつけて、壁にそってワイヤーロープで吊るして展示する。(地方ごとまとめて展示するのではなく、面ごとに、地方を比較する形で展示する。)

＜朝日新聞＞と＜読売新聞＞=合計17面×2紙=34面

20071014

1面=東京・大阪・京都・広島・北九州の朝刊+大阪・北九州の夕刊=計7
地方紙=東京・大阪・京都・広島・北九州の朝刊=計5
テレレ欄=東京・大阪・京都・広島・北九州の朝刊=計5
●地方の記事をすべて(もしくはその一部)で割って自立させた(その記事がどのような大きさで(表紙で)使われているか)から取り上げる記事の数を決める。①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

●見出し以外が文字が小さく見えにくいので、記事の内容を要約し、大きな字で見やすいPOPをつくって実物の記事の下に貼付する。

●キャプションの地方紙・その他の全国紙は、展示室中央に設けた「閲覧コーナー」で実物を自由に閲覧できるように新聞掛けに展示しておく。

●展覧室にアンケートを実施する。

●新聞①=1面(トップ記事)

東京	大阪	京都	広島	北九州	大阪(夕刊)	北九州(夕刊)
朝日	朝日	朝日	朝日	朝日	朝日	朝日

●新聞②=地方版/閲覧コーナー設置

東京	大阪	京都	広島	北九州	大阪(夕刊)	北九州(夕刊)
朝日	朝日	朝日	朝日	朝日	朝日	朝日

以上

【学生実習レポート】4

文化財実習C レポート4 16060500618 谷口拓
一 説明文
朝日、毎日、京都、産経、読売、Japan timesの各紙に取り上げられた戦争に関する具体的な体験談や戦争を伝える記事を表示し、具体的に戦争、そして平和を考えてもらうことを展示目標とする。戦後62年が経ち、具体的な戦争を知る人は年々減少している。この状況で戦争や平和を展示という形に一般の人びとに考えてもらうにはどうしたら良いだろうか。やはり社説等で学術的な語彙を展開しても、メディア慣れた現代人にはとっつきにくい。伝わりやすい、より人びとに密着して戦争を具体的に伝える必要があるだろう。私は、各紙を比較するのではなく、各紙がそれぞれ終戦の日に当たって掲載した具体的な戦争関連記事を用いた展示を作りたい。主要テーマは「新聞にキザされた戦争たち」とする。詳細な展示内容については方法と共に後述するが、小テーマとしては、①「戦争は今もある」、②「震！戦争」、③「伝えるべきもの」とカテゴリー分けを。それぞれ数々の戦争への思い、取り組みの記事があるが、そこに共通するのは「平和」への思いである。まずは具体的に戦争を知り、具体的にだからこそ、自分に関係させて「平和」を考えてほしい。

07年8月15日付け産経新聞 03頁-① 07年8月15日付け産経新聞 11頁-②
07年8月15日付け産経新聞 25頁-③ 07年8月15日付け京都新聞 27頁-④
07年8月15日付け毎日新聞 21頁-⑤ 07年8月15日付け毎日新聞 25頁-⑥
07年8月15日付け毎日新聞 26頁-⑦ 07年8月15日付け毎日新聞 29頁-⑧
07年8月15日付け読売新聞 27頁-⑨ 07年8月15日付け朝日新聞 23頁-⑩
07年8月15日付け朝日新聞 24頁-⑪ 07年8月15日付け朝日新聞 31頁-⑫
07年8月15日付け JAPAN TIMES 02頁-⑬ (※①-⑬、⑭はロシマ分載)

二 展示方法 (広いスペースでの展示と想定)
テレビの電子辞書に記事全文を転記し、先述の3つのテーマのうち、一つを上の1階に設置し、他の二つは別の階に設置する(見やすいように)。
1. 「戦争は今もある」のテーマに絞って制作する。その下に設置する説明文の作成(自由)。
2. 「震！戦争」として展示。その下に設置する説明文の作成(自由)。
3. 「伝えるべきもの」として展示。その下に設置する説明文の作成(自由)。

【学生実習レポート】5

文化財実習Aレポート5 1611050053-3 友菜葉夢
「8月15日付中国新聞 展示案」
①タイトル：語り継がれるヒロシマの体験—おねがいで—
「ばくは、子どもたちが、うれしそうに汽車に乗るのを見て、鉄道員になったんだ。どうして、こんな子どもまでが、死ななければならぬんだ。もういやだ、もういやだ！」
戦時中、旧国鉄職員だった澤田満明さんは、広島県呉市の仁方駅で原爆の日を迎えました。業務の応援のため広島駅に向かった澤田さんは、そこで原爆の惨状を目にします。二人の赤ん坊を抱えたまま亡くなった女性、全身にやけどを負い、「水をください」と訴える少年は、水を奪えたとそのまま息を引き取りました。
1945年8月6日午前8時15分に原子爆弾が投下され、爆心地付近は鉄やガラスも溶けるほどの高熱に晒されました。多くの人の皮膚は焼けてたれ下がり、被爆者は水を求めて広島を流れる川に殺到し、川には幾重も死体があり重なっていたといわれています。広島駅は、全身焼け爛れ、「おねがいで、水をください」と言いながら亡くなった人達で埋め尽くされました。
澤田さんの体験を、二年の歳月をかけ絵本として出版されました。語り継がれるヒロシマの体験を、私達はどのように受け止めるべきでしょうか。
②2007年8月15日付中国新聞
③壁一面に原爆投下直後の広島の写真や拡大したものを貼り付ける。その壁に画面をはめ込み、澤田満明さんの証言ビデオを上映する。その隣に中国新聞第10面「ヒロシマと結ぶ 子どもたちの手に」の記事を取り切り、パネルにして展示する。テレビ画面にはさんで反対側には説明文を展示する。その下に台を設置し、「(著) 井上こみち、藤崎康夫 (画) BOOSUKA 『せんそうってなんだったの？ 7原爆・沖縄 おねがいで、水をください』 学習研究社、2007年」の絵本を鑑賞者が読めるように展示する。

〈展示〉
壁一面に原爆投下直後の広島の写真や拡大したものを貼り付ける。その壁に画面をはめ込み、澤田満明さんの証言ビデオを上映する。その隣に中国新聞第10面「ヒロシマと結ぶ 子どもたちの手に」の記事を取り切り、パネルにして展示する。テレビ画面にはさんで反対側には説明文を展示する。その下に台を設置し、「(著) 井上こみち、藤崎康夫 (画) BOOSUKA 『せんそうってなんだったの？ 7原爆・沖縄 おねがいで、水をください』 学習研究社、2007年」の絵本を鑑賞者が読めるように展示する。

【学生実習レポート】6

8月15日の新聞の朝刊の一面から見る終戦記念日
授業レポート
文学部東洋史学専攻
学番号: 1607050001-2
氏名: 石井文樹

1. 説明
1945年8月15日に第二次世界大戦が終結し、日本ではこの日をもって終戦記念日とするようになった。8月15日の紙面において、この日に触れない新聞はない。しかし、朝刊の場合は、意外にもそのことについて取り扱うスペースが少ない場合や、中には、朝刊の紙面にはその日起こったニュース以外を書いている新聞も存在する。
用意した資料は、まず日本を代表する大新聞でありながら、そのスタンスが極端に異なる産経と朝日の二紙(次に産経新聞として日本でも最も有名な日本経済新聞、どんな事件が起ころうとも阪神タイガースを一面にするスポーツ新聞デイリースポーツ、アメリカ企業を背後に持つ英字新聞The Japan Times、そして自分の地元の神戸新聞)である。
これらの新聞は、その保持するスタンスが明確であり、比較検討してもその差は歴然としている。ゆえに、展示資料として観衆に理解されやすく、最低限の説明で事足りる。展示資料としてこれらの新聞を選んだ理由である。

2. キャプション
2007年8月15日付け朝日新聞
2007年8月15日付け神戸新聞
2007年8月15日付け産経新聞
2007年8月15日付けThe Japan Times
2007年8月15日付けデイリースポーツ
2007年8月15日付け日本経済新聞

3. 展示方法
展示として扱うのが新聞紙面であるため、その特質として軽い紙製であり加工しやすい一方、耐久性等では絵画などに比べて劣る点が挙げられる。そのため、展示は一面全体を取り切り、額に入れ壁から吊るす形を基本とする。
まず、展示者である自分が基本としている新聞として、神戸新聞を一番最初に展示する。地域面である二四と二五面の関連記事を併せて展示することで、地方新聞として、神戸新聞が8月15日どのようの記事をまとめているのか、より分かりやすくなると思われる。
次に、その差が顕著な二大紙を展示する。極端なスタンスのおおきな朝日産経とする。
朝日新聞は三面の社説と二二面の読者投稿欄、産経新聞は関連記事として三と十一面の関連記事も展示することで、新聞社の性格をよりよく表すことができると推察される。
その次が、これ以上順番を下げる、展示を見るのに疲れた見学者から読み飛ばされる懼れの高いThe Japan Timesである。二面・三面の関連記事は、外国資本の元にある新聞の特質を良く表しており、展示に含めるべきであろう。
残ったのが日本経済新聞とデイリースポーツである。より明確な強い紙面であるデイリースポーツを最後に置いた方が、日本経済新聞を見学者が目を逸らす機会を潰さないとと思われるので、日本経済新聞→デイリースポーツの順番をしたい。
日本経済新聞・デイリースポーツ共に、歴史的な8月15日にちなんだ関連記事というものも掲載されているため、その代替として、それぞれの特色を最もよく表す欄を併せて展示しておくべきだとと思われる。日本経済新聞は経済欄と金融欄、デイリースポーツは一面の関連記事である二面と三面を展示するのが妥当と思われる。

【学生実習レポート】7

日本が伝えたいこと、「私」が伝えたいこと
文学部 西洋史学

2007年、今年は日本の久間章生元防衛相、アメリカの大使、ロバート・ジョゼフ前国務次官ら二人の原爆容認とも捉えられ再発言によって、日本は傷つけられ、また各国での原爆や戦争の認識の違いについて再確認させられた。勿論それは日本に限ったことではない。日本は戦争を経験した多くの国々の一つに過ぎず、また日本が持っている戦争観も日本独自のものであるということを見せなければならぬ。世界平和の実現の為に他お互いの戦争観、平和観を共有し、理解することが必要不可欠である。
対象は上記のニュースを見聞きでき、また戦争についての国家が定める歴史的教育、道徳的教育を9年以上受け、理解できた高校生とする。展示場所は校内。日本に持つ戦争、「私」が感じる戦争とは何か、それを他者(友人、市民、外国人)に伝えて貰うことが目標。英語のディスカッション、または英語で戦争に関しての記事を書き、新聞資料と同様に展示するワークショップも開くことを提案する。

新聞資料
○2007年8月15日付 The Asahi Shimbun 記事切抜3枚
○2007年8月15日付 The Japan Times 記事切抜5枚
○2007年8月15日付朝日新聞記事切抜9枚
○2007年8月15日付京都新聞記事切抜4枚
○2007年8月15日付産経新聞記事切抜11枚
○2007年8月15日付読売新聞記事切抜9枚

展示方法
・校内にある掲示板に新聞社別に記事を貼る。
・教室一つを使い、両面に記事のあるものやその他複数の記事を展示。両面のもはアクリル板で挟み、机に立てるように置いて両面が読めるように展示。
・ワークショップで作られた生徒の記事や作品も随時資料の一つとして追加していく。
・展示用に使う教室をワークショップ時にも使う。